

伝説，事実，真実そして／あるいは文学？

— ロマン・ロラン = 高田博厚往復書簡発見に触れて —

高橋 純

1. 1932年9月23日付けの短信

ここに1通の手紙がある。日本人彫刻家高田博厚に宛ててロマン・ロランが送ったものだ。さして長いものではないので、読者にはまず一読願いたい。

(次ページ図版1) この手紙が書かれたとき、ロマン・ロランはスイスのレマン湖畔のヴィルヌーヴに暮らし、高田はパリで彫刻修行の赤貧の日々を送っていた。(この直後に図版を掲げると手書きの1葉が途中切断されてしまうので、敢えてそれを避けるため、蛇足かとも思うがとりあえずここには2人の人物を紹介する小窓を挿入する。)

ロマン・ロラン (1866—1944)

ロランはフランス的というよりは世界的な作家であり、その国際主義と民衆愛は戦争反対の積極的活動に高まり、第一次大戦中には、祖国を追われてスイスに亡命した。『戦乱を越えて』(1915)は、彼の戦争反対の立場を明確に述べた文章で、戦後は、ヨーロッパそのものを祖国にしようとする青年たちの雑誌「ユーロップ」に協力した。作品としては『ジャン・クリストフ』(1904—12)、『魅せられたる魂』(1922—33)の大河小説があり、激動期に生きる人間——前者では男性、後者では女性——を主人公として、その内面の発展を描いた。その他音楽研究、『ベートーヴェンの生涯』(1902)や『ミケランジェロ』(1903)など偉人たちの伝記、演劇を大衆に開放しようとする民衆劇ならびにその理論『民衆演劇論』(1903)など様々な分野で活動した。1915年、ノーベル文学賞受賞。(『増補フランス文学案内』[岩波文庫、1996]の解説に基づく。)


高田博厚 (1900—1987)



1931年、30歳の時にフランスに渡り、近代彫刻をロダン、マイヨールに学ぶ。ロマン・ロラン、アラン、ジャン、コクトー、ルオーらと親交を結び、1957年に帰国するまで、30年近くフランスに滞在。異邦人として孤独な闘いを続けながら、フランスの知性に深い影響を受ける。1931年春に渡仏直後、高田は片山敏彦に連れられてヴィルヌーヴのロラン邸を訪ね初対面を果たしたが、その数日後にはロラン自身の胸像制作を依頼されることとなった。(高田のエッセイ集『フランスから』[講談社文芸文庫、1999]カバーの高田紹介コピーに基づく。)


Villeneuve (Vand) villa Olga

23 1906 - 1932

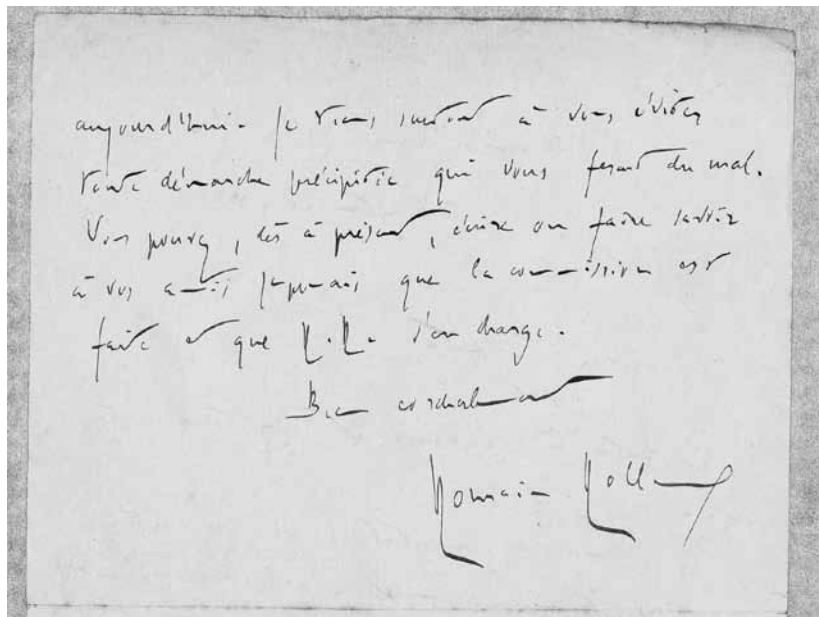
Cher Takata

Je rentre à Villeneuve  12 jours de votre
lettre.

Je suis en fait assis : ne vous mettez
pas en avant, personne d'autre ! ne vous compromettez
pas ! Ce serait un sacrifice inutile, et peut-être
~~très~~ inutile pour vous : car il pourrait vous
faire le retour au pays  à votre famille, pour
toute la vie.  Je suis moi-même

communiquer le texte de la protestation (en
corrigeant le style) au "Humanité",  faire
en sorte qu'elle y paraisse, approuvée par Cachin.

Je ne vous en dis pas plus pour



(図版 1) 1932年9月23日付ロマン・ロランの手紙

ヴィルヌーヴ (ヴォー), ヴィラ・オルガ

1932年9月23日

親愛なる高田へ

ヴィルヌーヴに戻り、あなたの手紙を見つけました。

取り急ぎこれを書いています。あなたが個人として前面に出てはなりません！ あなた自身が巻き添えになるようなことをしてはならないのです！ 敢えてそんなことをすれば、あなたは無用の犠牲を払う羽目に陥るだろうし、おそらくあなたにとって致命的なことになってしまうでしょう。なぜなら、[日本政府]はあなたの生涯にわたって、国に帰る道も、家族のもとに戻る道も閉ざしてしまいかねないからです。——— これから私自身の手で抗議文を（訳文を修正したうえで）ユマニテに送り、カシヤンの支持を得て紙面に載るように計らいます。

今日のところはこの件についてこれ以上は言わずにおきます。私としては何よりも、あなたが性急にことを進めた挙句、あなた自身に危害が及ぶようなことがないように願っているのです。今はもう、日本の友に書いてもよいし、知らせてもかまいません、任務は果たした、R. R.が引き受けた、と。

心をこめて、
ロマン・ロラン

この文面からすると、ロマン・ロランが、なにやら日仏の政治権力が介入してくることが懸念される危険な案件に関わっている高田の身を案じて、早まった行動をとらぬように諭し、自分が代わって「抗議文」の「ユマニテ」紙への掲載のために動いてやろうとまで言っていたことが分かる。しかしその「抗議文」がいかなるものであったのかはこの手紙からは知りえない。

一方、高田はといえば、1974年に雑誌『世界』に連載された回想録にこの時代の記憶を次のように記している。(高田は40年を隔てた後にこの回想録を自分の記憶のみを頼りに書いたことを銘記しておくべきだろう。)

私は思いがけぬ機会に会って、間もなくイタリア巡礼に出た。そしてこの年の夏にクラマールに移り、十一月にはスイスのロマン・ロランの家に、ガンジーに会いにでかけた。この期間のいつ頃だったかは覚えていないが、ある日日本から嚴重な封をした郵便小包が届いた。開けてみると『無産者新聞』で、小林多喜二が拷問獄死した追悼の特別号である。遺骸を囲んだ「同志」たちの大きな写真が載っている。これをフランスの同志たちに伝えてほしい。抗議の文を『ユマニテ』紙に出してほしいと手紙が添えてあった。

私はその新聞を持ったまま、市街電車に乗り、座席で広げて読んでいた。日本語だから誰にもわかりっこない……ふと眼をあげると、私の前につり革にぶらさがって日本人が立っており、びっくりしたような顔で私を見ている。間もなく後に知り合ったのだが、これが嬉野満州雄だった。「パリに着いたばかりで、電車に乗ったら、『無産者新聞』を読んでもる奴がいる。あんなにおどろいたことはなかった」

『ユマニテ』紙に抗議文を出すのにどうしようか？ 共産党のマルセル・カシャンと親しい画家のポール・シニャックが私を大事にしてくれているので、まず彼に相談した。「それはぜひ出さなければいかん！」と彼の方が大乗気だが、私の名は出せない。「まず、スイスのおやじさんに相談してみろ」。私はロランに書いた。即座に返事が来て、「私が全責任を負う。今フランスは反動政府だから、君の名を出したら、いっぺんに追放されてしまう」。私は新聞の記事の大意をフランス語で書いて、新聞といっしょに彼の許に送った。『ユマニテ』紙は全面をあげて、ロランの抗議文と小林の遺骸の写真を転載した。

(『分水嶺』岩波現代文庫pp.74-75)

ロマン・ロランの手紙と高田の回想録の記述とを突き合せて読むならば、「ユマニテ」紙への掲載に至った経緯からして、ロランが言う「抗議文」と、高田が言うところの「ロランの抗議文」は同じものであり、かつて日本でい

いわゆる都市伝説のように取りざたされた、フランス共産党機関紙「ユマニテ」に掲載された「ロマン・ロランによる小林多喜二虐殺抗議文」に他ならないと合点がいく、というのが普通だろう。ところが、である。改めてロマン・ロランの手紙の日付を見ると1932年9月23日となっているが、多喜二が日本の特高警察によって殺されたのは1933年2月20日だった。この時間のずれは何なのだ。また、高田はといえば、雑誌掲載時の回想録を後に単行本にまとめた際に、上記引用の箇所には自分の記憶違いがあったとして、「(小林の死を1932年のように思っていたが、1933年だったと知らせてくれた人があった。またその頃『無産者新聞』はすでになく、『赤旗』^{せっき}に変わっていたという。)」という一文を括弧つきで加筆しているのである。しかし高田は、本文を削除したり、修正することはなかった。それはつまり、彼は一読者からの指摘を受けて自分の記憶に時系列上の誤りがあったことには納得したが、当時の高田とロマン・ロランの間に印象深い緊迫したやり取りがあったのだという確信は揺るがなかったからなのだろう。事実、高田の記述からひとまず「多喜二」の名前を伏せて読み直すと、その内容はロマン・ロランが手紙で伝えてきたことに逐一符合すると言ってよいものとなるのだ。(高田がロランに相談の手紙を書いたら、「即座に返事が来て・・・」と言うところのその返事とは正にこの1932年9月23日の手紙に違いない。高田の記憶が事実と相違するところがあるとすれば、高田はロランの返事を受けてから「赤旗」^{せっき}の記事をフランス語に訳したと思っていたが、実はそのフランス語訳された記事はロランへの相談の手紙と一緒に送られていたのだという点くらいだろう。)

この符合が嘘や偶然でないとするならば、そしてロマン・ロランが約束通り高田に代わって「任務を果たした」のならば、1932年9月23日以降の「ユマニテ」紙にその結果が見られるに違いない。そして事実はこの推測を裏切らなかった。以下の写真は1932年9月29日付けの「ユマニテ」第一面である。

(図版2)



(図版2) 「ユマニテ」1932年9月29日第1面

当該の記事のタイトルは、「*La terreur blanche au Japon*」（日本の白色テロ）とある。この記事には、はじめに事の経緯を説明するコメントがあり、続いてロマン・ロランからフランス共産党首マルセル・カシヤン宛ての依頼

状、そして1932年7月20日の日付をもつ日本共産党中央委員会のアピールのフランス語訳が掲載されている。このアピールは、確かに日本において同年7月20付けで作成され、非合法新聞『赤旗』1932年7月30日（第87号）に掲載された、「日本に於ける百九十一人の共産主義者の求刑に対して国際プロレタリアート勤労大衆に訴ふ」をほぼ正確にフランス語訳したものと断定できる。ここに併載された写真は当然ながら多喜二の遺骸^{せつき}を写したのではなく、靖国神社境内に設けられた「遊就館」の建物を背にして整列するフランス軍海兵の写真であった。その写真下の説明には、「フランス帝国主義はおのれの軍隊をして、同盟国日本が満州において達成した略奪行為の経験から学ばせんとしている。上の写真は、東京の戦争博物館前に整列するフランス軍海兵の一団である」とある。この写真は高田が所持していたものではなく、「ユマニテ」編集部が記事掲載に合わせて選んだものだろう。その内容からしてフランスの新聞の第1面を飾るのはきわめて異例と思われるこの記事は次のように読まれる。

日本の白色テロ

我々のもとにロマン・ロランから書簡が届いた。以下にこれを、日本共産党の訴えと併せて掲載する。

我々の同志は自国〔日本〕においてこの上なく英雄的な反政府運動を展開しているが、この間の犠牲者は数千の数に上っている。彼らはその活動を非合法で行うしかないゆえに、以下で日付を突き合わせてみれば、活動の裏付けとなる文書資料をこのヨーロッパにまで届けるためにいかに大なる犠牲を必要としたかがわかるだろう。

日中戦争開始〔1928年の齊南事件等〕以降、またフランス帝国主義に援護された満州事変以降、我々が同志に向けられる攻撃は非道さを増すばかりである。

ここにおいて西欧プロレタリアートは、その同志たちが果敢な抵抗運動において示す勇氣に胸打たれずにはいられない。先のアムステルダム

の会議[1932年8月の世界反戦大会]において緊要とされたことがある。それは、すべてのプロレタリアート、なかんずく社会主義的勤労大衆を促して、日本の革命的人民との連帯を表明し、東京の帝の同盟者たるこの国の政府を含む彼らの迫害者に圧力をかけることである。

以下がロマン・ロランからの手紙である。

親愛なるマルセル・カシャン、

日本から私のもとに知らせが届いています。そこに同封されていた日本共産党の訴えをあなたに託しますが、これは党の非合法新聞に掲載されたものです。有罪宣告を受けた不幸な人々を救える可能性は無きに等しい。しかし彼らの同志たちは世界に向けて、せめてその憤激の叫びを届かせたいと、悲痛な訴えを送ってきているのです。私はあなたならばこの訴えを「ユマニテ」紙上に迎えてくださるものとする次第です。

敬具

ロマン・ロラン

国際プロレタリアートに訴える

全世界の同志、労働者、農民、勤労大衆、プロレタリアの諸君！

さる7月5日、天皇の法廷（軍国ファシズム掌中の傀儡にすぎない）において検事総長は、191名の我らが同志に対し、死刑、無期懲役、総計1000年に及ぶ禁固刑という過酷極まる求刑をした！

この191名は犠牲者のわずか一部にすぎない。1928年以降（すなわち1928年3月15日の大量検挙、1929年4月6日の検挙等）テロ体制の下で繰り返された大量検挙により何年にもわたって投獄されてきたコミュニストの犠牲者は幾万の数に上るのである。この191名は日本のコミュニストの前衛であり、ブルジョワ政府と果敢に闘って日本の労働者、農民、勤労大衆の立場を守り、彼らを新たなソヴィエト政府の建設へと導いてきたのだった。

(一略一)

同志諸君！諸君のもとでも革命的労働者に対するテロと暴虐が見られるであろう。

我らが極東にあつては、中国において、韓国において、台湾においても、白昼堂々革命家に私刑が加えられ、法の裁きもなく殺害されてしまうのである。

だがしかしわれわれはなおも現状に立ち向かうことができるであろう、我らが191名の同志の解放を求める全世界の人民大衆の大いなる運動に支えられ、すべての国のプロレタリアの抗議の声に支えられるならば。

われわれは全世界のプロレタリアに訴える、我が国の帝国主義の犠牲者の解放を願う諸君の力強い支援を求め、待ち望んでいる！

我々は、死刑、無期懲役、総計1000年に及ぶ禁固刑を宣告された191名の日本共産主義者を即時釈放せよ！

白色テロに抗議せよ！

中国におけるソヴィエト革命を擁護せよ！

日本による満州国植民地化反対！

日本陸海軍は中国から即時撤退せよ！

帝国主義戦争に反対せよ！

1932年7月20日

日本共産党中央委員会

この時代の日本に目を転じると、同じ1932年4月には特高警察によるコップ（日本プロレタリア文化連盟）大弾圧によって共産主義者の一斉大量検挙が行われた。それに続く不当な裁判による多くの共産主義者への過酷な求刑に抗議して、日本共産党中央委員会は同年7月20付けで国際プロレタリアートに訴える「抗議文」を作成し、これを「赤旗」7月30日付け78号に掲載したのだった。（図版3）

これで事が明らかになる。ロマン・ロランが手紙の中で語った「抗議文」とは、この日本共産党中央委員会が出した「訴え」であったのだ。そしてこの「訴え」をフランス語に訳したのは高田博厚であり、その訳文はロマン・ロランの手直しを経て「ユマニテ」紙面に出現することになったというのが事の真相だったのだ。

この時代、ファシズムと軍国主義が日々その脅威を増し、人間の自由と平和を求める思想が抑圧と抹殺の憂き目に会う日本に生きる友の運命を案ずればこそ、高田はその日本の「誰か」から託された「訴え」をロマン・ロランに委ねたのだ。その「誰か」の願いは1932年9月29日の「ユマニテ」紙面で叶えられたのだが、その事実の知らせが日本に届けられることはなかった(高田への当該新聞の送り主・依頼主は不明だったから)。その後半年を経ずして小林多喜二が同じ思想的迫害の犠牲者となる。その死の報を得た時の高田のうちでは、おそらくは日本から遠く離れたフランスにあればこそ、小林多喜二という大きな名をもった死の重みも、数の中に紛れてしまう無名人たちの死の重みも、「同じ重さで対比」していたに違いない。実際、時系列に沿って見れば、多喜二虐殺はコップ大弾圧の最終局面の悲劇的出来事だったのだ。そしていつしか多喜二の名と、191という数に紛れた無名の犠牲者たちは、同じ一つの思想に対して同じ権力から加えられた暴虐の記憶として高田の中で同一化していったのに違いない。

こうして、冒頭に掲げたロマン・ロランの手紙の発見は、私にとっては、「ロマン・ロランによる小林多喜二虐殺抗議文」が存在するという伝説をめぐって、その不在の証明を完了させる物的証拠の出現となったのだ。この物的証拠の意味するところは、私自身にとってはむろんのこと、かつて『分水嶺』を読み、件の多喜二伝説の出所となった一節に出会って以後解きえぬ疑問を抱き続けてきたに違いないすべての読者にとって、限りなく大きい。

私がこの「ロマン・ロランによる小林多喜二虐殺抗議文」伝説の真偽を知ろうと企てたとき、わずかに入手できた状況証拠のみで推論を進める私には、すりガラスの小さな窓越しに相手の姿を追うもどかしさが消し難く付きま

とっていたのだが、今やロマン・ロラン自らが、高田の経験の真正性を証言してくれている。私は、ロマン・ロランから、特段の配慮のもとにただ一人の友に送られた言葉を、その受け手である高田と共に聞くことができたのだ。これは私にとっては、自分が立てた推論の正しさの実証であると同時に、高田の体験が私自身のうちで再現反復されたに等しいと言える強烈な印象を与えられた瞬間だった。

高田は自分の回想録を書き始めるに当たってこう言っていた。「自分に嘘があったら『自伝』の意味は失われてしまうが、しかしそこには『事実』と『真実』との対比が常にあるだろう」(p.2) その通りだ、と私はこの「伝説」の検証を終えて改めて強く思った。結局私は、高田その人が当初から自分の記憶錯誤という「嘘」が紛れ込んでいると承知していた証言から出発して、「事実」と「真実」がいかに近く、また同時にいかに異なるものであるかを見極めることに努めた果てに、高田博厚の人生経験の中の貴重な一瞬に立ち会う幸運に恵まれたのだから。

II. 計23通の往復書簡

実はBnF（フランス国立図書館）で私が発見したのはこの1通のみではなかった。この1通を含むロマン・ロランから高田宛ての9通、高田からロマン・ロランあての14通、計23通の書簡の束だった。

生前高田はこう語っていた、「向こう [フランス] では、ロランやアランの手紙を持っていたのに、戦争中に日本人の持ちものを調べられたときに取り上げられてしまった。あとで品物を返してもらったのは、日本人のうちではほくだけなんだけど、そういう貴重なものはみんな返してよこさなかった。」(雑誌「同時代」39号、1981年)つまり高田は、滞仏中の高田とロマン・ロランの交流の証となる書簡類は永久に失われてしまったものと諦めていたのだった。

FONDS ROMAIN ROLLAND（ロマン・ロラン寄贈資料）の中には生前

ロマン・ロランに宛てられた高田の手紙が保存されていたことには十分納得できるのだが、ロマン・ロランから高田に送られた手紙が、しかも高田自身は取り戻すことが出来ぬまま散逸してしまったと信じていた手紙が、いかなる巡り合わせでフランス国立図書館の書庫に納まることになったのかは現在のBnFの管理責任者にも不明なのである。推測できるのは、1944年8月に高田がベルリンに強制移送され、2年半後にパリに戻るまでの間であろうということだ。その間に、没収された高田の所持品のなかから見つかったロマン・ロランの署名入りの書簡が、その署名の重みが導きの糸となって、1944年12月30日のロマン・ロラン没後設けられた「ロマン・ロラン寄贈資料」の中に加えられるようになったのだろう。

（以下はこの往復書簡発見に遭遇するまでの筆者の試行錯誤の記録でもある。）

永遠に失われ二度と読み返すことは叶わないと生前の高田博厚自身が諦めていた、その高田がフランスに生きたるか昔にロマン・ロランと交わした往復書簡が見つかった。私自身このようなかたちで目にすることができるとは予想もしていなかった。だからこれが発見できたのはまったくの偶然と言ってもよいのだが、発見者を導く手がかりはあった。それがあの高田の記憶違いだった。

……小林多喜二虐殺への抗議の声を「ユマニテ」紙に掲載して世界に訴えるにはどうしたらよいか、とロマン・ロランに尋ねたら、（日本に対する国家反逆罪に等しい行動に高田の名前を出すわけにはいかないからとて）ロマン・ロラン自身がその任を引き受けてくれ、「ユマニテ」の協力もあって、「抗議文」掲載は実現したという。『分水嶺』中のこの証言はいわば「真犯人しか知りえない秘密の暴露」である。しかし高田のこの回想録の雑誌掲載時の読者から、「多喜二は1933年に殺されたのに、高田はこれを1932年に起きた出来事として語っているではないか」と間違いを指摘された。この読者とは嬉野満州雄だろうと推測される。彼は高田が暴露した秘密の真偽を見極めるための唯一と言ってよい重要な証人だった。1932年にパリに到着した嬉野

が、その年の夏のある日、パリの市街電車の中で高田と遭遇しなかったならば、後年高田の回想録を読んで、高田が多喜二の死を1932年と勘違いしていたことを言い当てられる人間は一人もいなかったはずである。すると、高田が40年後に暴露した「秘密」は根も葉もない作り話だったのだろうか。

事の真偽を確かめるには、当時の「ユマニテ」に当たってみればよい、と考えるのが自然だろう。そこで私は多喜二の死(1933年2月20日)以降の「ユマニテ」の通覧を始めたが、1935年分まで辿って立ち止まらざるを得なくなった。この問題に関して高田が最初に相談した相手はポール・シニャックで、彼が高田に、まずは「スイスのおやじさん」ロマン・ロランに話してみよう唆してくれただというのだが、そのシニャックは1935年8月15日に敗血症で亡くなっているからだ。高田の回想を信頼するならば、シニャックの命日以後に「抗議文」が現れることは期待しがたい。しかしこれで「抗議文」の不在が証明されたとは厳密には言い切れないし、ましてやこの限定された閲覧作業を踏まえて高田嘘つき説を結論づけるのはいかにも躊躇われることだった。その理由の一つ、と言うより唯一の理由は高田の文章の「質」である。稀有にして多様な自らの体験を振り返る高田の語り口は、いたずらな誇張も過剰な自己顕示も感じさせない。その姿勢が本物であるならば、当時の日本で崇拝に等しい評価を受けていたノーベル賞作家が高田の依頼を受けて多喜二虐殺抗議文を書いたという与太話を飛ばすようなことがあるとはまったく想像し難いのだ。

この件について高田は、連載誌『世界』の次号、1974年4月号、表題「クラマールの夏」の末尾に短い断り書きを加えた。(当該雑誌p.250)

〔断り〕 前号に書いた小林多喜二の獄死は一九三三年のことらしい。私はこの「自伝」を記憶のままに書いているので、昔のことだから間違いがあるかもしれない。しかし文献として書くのではなく、「自分のこと」のみを主にするのだから、そのおつもりで読んでいただきたい。嬉野からも、七月十四日の「オー・ミュール」参りで追放された羽生操

たちとは関係なかった、と書いてきたので訂正しておきたい。[この後に若干の人名・地名の表記ミスの訂正が続く。また、七月十四日の「オー・ミュール」参りとあるのは、当時毎年この日にペール・ラシェーズ墓地で行われた、1871年のパリ・コムニオン弾圧犠牲者追悼集会への参加を意味している——引用者注]

回想録の執筆にあたり、文献としてではなく、「自分のこと」を書くとはどういうことなのか。高田は『分水嶺』の冒頭に執筆の心構えとして、「自分に嘘があったら『自伝』の意味は失われてしまうが、しかしそこには『事実』と『真実』との対比が常にあるだろう」（文庫版p.2）と記している。ならば、読者の目には嘘（事実からの乖離）と見える記述の背後にも、「事実」と対比される著者高田にとっての「真実」が埋もれているのかもしれないではないか。高田の記憶違いを断じるだけではその「真実」は少しも明かされはしないのだ。そして私は、回想録執筆途中ですでに明らかになった自分の記憶錯誤に気付きながらその間違いを隠しもせず、取り繕おうとしなかった高田の姿勢から、高田自身にとっても見失われた「真実」がどこかに潜んでいるのではないかという確信に近い思いを抱いたのだった。

最初に得られた手がかりは1933年3月14日付「ユマニテ」紙の多喜二虐殺報道記事だった。そこには、いかなる関連で挙げられたのか分かりづらい文脈の中にロマン・ロランの名が現れているが、記事自体は彼の手になる抗議文ではない。（図版4）

小林は若かった。1903年に北日本の小村に生まれ、非常に若くして社会問題に関心を寄せ、ほどなくして革命的知識人および労働者の前衛として戦うようになった。

彼は共産党機関誌と協働し、「戦旗」には、日本共産党の闘争を描いた『1928年3月15日』、次いで『蟹工船』や農民ストを語る『不在地主』といった傑作をつぎつぎに発表したのだった。彼は続いて他の作品も発表したけど、そのいずれもが労働者階級とわれらが共産党の闘争にささげられたものだった。彼は革命的作家中央委員会メンバーであった。

警察の手で殺害

過去数ヶ月間に彼は決然として、極東における帝国主義的略奪戦争および反革命戦争に抗する運動の先頭に立ち続けていたのだった。

彼の不屈の革命的活動は日本帝国主義の脅威となっていた。

われらが同志は威嚇にも脅迫にもひるむことなく、その立ち位置を変えることはなかった。

去る2月20日、小林は「反軍国主義活動」の廉で逮捕された。

その1時間後、彼は警察署で死体となっていた！小林は殺されたのだ！

全世界のプロレタリアは日本軍国主義のこの新たな犯罪に対して結束して立ち上がる。この犯罪は、日本の人民大衆の戦いの意志を掻き立てずにはいないのである。

抗議文はこの報道以降に書かれたとも推測できるので、この件に関する高田の最初の相談相手であるポール・シニャックが死去した1935年8月まで辿ったが、それらしきものは見つからない。やはり、ロマン・ロランによる「多喜二虐殺抗議文」は作り話かと不安を覚えずにはいられないが、他方で、それがロマン・ロランに無関係な作り話だったとしたら、33年3月14日の多喜二虐殺報道の中にロマン・ロランの名が出現した事実が不可解極まりない。そこでこの記事を仔細に検討してみると、多喜二虐殺の情報は「ユマニテ」報道以前にフランスに伝わっていたこと、そしてロマン・ロランの「呼びかけ」はその「ユマニテ」報道以前の出来事に関わっているらしいことが読み取れる。こうした判断に立って時系列を遡ると、革命的作家・芸術家協会（A.E.A.R.）が編集する号外新聞^{フィユルージュ} *Feuille Rouge*の同年3月5日（推定）発行の一号（世界の作家・知識人に反ファシズム闘争を呼びかけるロマン・ロランの檄文を一面中央に掲載、図版5）、そして3月7日（推定）の同紙二号の多喜二殺害への抗議文が見つかった。（図版6）

ロマン・ロラン

褐色ペスト¹は一挙に黒色ペスト²を凌駕してしまった。ヒトラーのファシズムはわずか4週間に、その師とも範とも仰いだイタリアファシズムが過去10年間に振るった卑劣な暴力を凌ぐ暴虐を恣にしたのだ。彼らは先の国会議事堂炎上³を稚拙にもおのれの暴虐の正当化のために利用せんと謀っているが、これこそ警察の手による下劣な挑発行為だったのであり、ヨーロッパ人の誰一人としてこれに欺かれはしない。我々はここに彼らの犯した侵害と虚偽を世論の前に暴きだす、——彼らは暴力的な一反動政党にすべての公の武力を掌握させてしまった、——彼らの政府は殺人に行き着く犯罪行為まで合法化してしまった、——彼らは言論と思想の自由をことごとく扼殺してしまった、——彼らは傲然とアカデミーの世界にまで政治介入し、自説を枉げぬ勇気を示した稀有な作家芸術家を追放してしまった、——彼らは革命政党のみならず社会主義者やブルジョワ自由主義者の中からさえ、人望ある人々を逮捕してしまった、——彼らはドイツ全土を戒厳令下に置いてしまった、——彼らはあらゆる現代文明の礎である基本的自由および権利を停止させてしまったのである。我々は訴える、人および市民の尊厳を陵辱する卑劣な犯罪行為への怒りと、そして、こうした臆面も歯止めもない犯罪に走るテロリズムと戦う者を結束させる連帯の意志とを我々と分かち合うかぎり、いかなる党派に属そうとも、ヨーロッパもアメリカも問わず、すべての作家、すべての世論の代弁者が、我々の抗議の声に唱和せんことを。(強調引用者)

1933年3月2日

(以下の注は引用者による)

- 1 ナチスドイツ親衛隊の制服の色から生まれた表現。ナチスの暴力的支配をペストの猛威に例えている。
- 2 従来ペストは「黒死病」と称される。ここでは「黒シャツ隊」と呼ばれたイタリアファシスト党武装行動隊に重ねてイタリアファシズムを象徴している。
- 3 1933年2月のドイツ国会議事堂火災。ナチスは коммуニストの犯行と断じて弾圧の口実にした。

ce la *L'histoire du syndicalisme qui paraîtra prochainement.*

A. E. A. R.

N'oubliez pas ! que l'A.E.A.R. organise le mercredi 20 juillet, à 20 h. 30, à la salle du Grand Orient, 16, rue Cadet, une

SOIREE JAPONAISE

Une conférence sera faite par JEAN LOUBES, sur le front culturel rouge nippon.

Allocution de VAILLANT-COUTURIER

Leçons de poèmes, récits, théâtre révolutionnaire du Japon, par les camarades de la F.K.O.F.

Exposition de journaux, de dessins, tracts illustrés, etc.

Prix

Participation aux frais : 5 francs : 3 francs pour les membres de l'A.E.A.R.

(図版7) 「ユマニテ」1932年7月19日第4面 (部分)

A. E. A. R.

A.E.A.R. (革命的作家芸術家協会) 主催による, 7月20日水曜日グラン・トリアン・ホール (カデ街16番地) にて20時30分開催の「日本の夕べ」をお忘れなく!

- * Jean LOUBESによる日本赤色文化戦線に関する講演
 - * Vaillant-Couturierの挨拶
 - * F.K.O.F. (フランス・プロレタリア文化同盟) 同志による革命的日本の詩, 小説, 演劇作品の朗読
 - * 新聞, 絵, 挿絵つきビラ等の展示等々
- 参加費 5フラン : A.E.A.R.会員 3フラン

これによって、3月14日の「ユマニテ」の記事の、ロマン・ロランの呼びかけに応じたA.E.A.R.内に沸き起こった多喜二虐殺への抗議の声、という記述の流れの裏が取れた。そして、*Feuille Rouge* 2号の記事には、前年1932年に日本で起こったコップ（日本プロレタリア文化連盟）への大弾圧への抗議集会在パリで行われ、その集会で多喜二作品が高い評価を受けていたことが告げられてもいた。そこでさらに溯って「ユマニテ」を閲読してみると、日本でコップ大弾圧が行われた1932年春以後の7月19日付「ユマニテ」第4面の片隅に、日本のプロレタリア文化を紹介する「日本の夕べ」がA.E.A.R.主催で行われる旨の広告があり、これがコップ弾圧への抗議集会であったとしてもおかしくないと思わせる状況がパリに存在していたことが窺われるのだ。（前ページ図版7：ここに連続する図版5の発言、6の報道、7の広告の日付を対照させつつ再読するならば、それぞれの中に読み取れる情報・状況が、「ユマニテ」紙1933年3月14日の多喜二虐殺報道〔本論pp.16-17〕の文面に反映されていることが納得できる。なお「日本の夕べ」に関するその後の報道・論評等は現時点では知られていない。）

さらに同年夏には嬉野満州雄がパリにやってきて高田と遭遇したという高田自身の証言を手がかりにして同年の「ユマニテ」紙を辿っていくと、ついに9月29日の同紙第一面の記事「日本の白色テロ」を発見することができたのだ。この記事は、高田が回想録『分水嶺』で語っていた件の一節から小林多喜二の名前だけを除くと、まさにその一節の記述に照応するものなのだ——高田が嬉野と遭遇したときに読んでいた日本の非合法新聞の記事（「日本に於ける百九十一人の共産主義者の求刑に對して国際プロレタリアート動労大衆に訴ふ」と題する1932年7月20日付日本共産党中央委の「抗議文」）をフランス語に訳し、それをロマン・ロランの仲介でフランス共産党首マルセル・カシャンに依頼し、「ユマニテ」が協力してこれが同紙（1932年9月29日付）第1面に「日本の白色テロ」と題して掲載されたのだ。

こうして、「ロマン・ロランによる小林多喜二虐殺抗議文」の有無を確定

しようと始めた私の検証作業は、その「不在の証明」となった（この段階ではいまだ推定と言わざるを得なかったわけだが）と同時に、それとは別の出来事が、多喜二存命中に、高田が回想録で述べていたとおりに展開していたことの発見に至ってひとまず終結した。しかしここに至っても、私にとってはまだ不充足感が消えない。なぜかと言えば、回想録における高田の記述の背後に、彼の記憶違いが入り込んでいるにも拘らず過不足ない事実の裏づけを立証できたと言い切れるのに、その間に行われたはずの高田とロマン・ロランとの交信・交流を証す物証はどこにも見当たらないからだ。

パリのBnF（フランス国立図書館）「ロマン・ロラン寄贈文書（FONDS ROMAIN ROLLAND）」にはこの作家が死去した時にその手元に残されていたすべての手稿・書簡類が保管されているという。その中には、未だ公開されていない当時のロマン・ロランの日記も、あるいは公開の予定さえない、有名無名を問わない人々からの書簡類も含まれていよう。ならばそこに保管されているロマン・ロランの未公開日記の中に、あるいはロマン・ロランに宛てた高田の手紙の中に、この「抗議文」の新聞掲載に関わる一言が発見できるかも知れないではないか。私がBnFを訪ねることにしたのはこんな漠然とした推測に基づいてのことだった。結果は、ロマン・ロランから高田に宛てた書簡9通という予期せぬ発見であり、そのうちの一通の中でロマン・ロラン自身が、この「抗議文」の新聞掲載の仲介役を引き受けると伝えているのだった。これは、驚愕的であるにしてもその内容はなお推測どおりの発見だったが、これら9通の書簡の出現はさらに大きな意味を持っていた。高田からロマン・ロラン宛の手紙の方は、当初予想したとおりに「ロマン・ロラン寄贈文書」の中に14通見つけることができたわけが、これら14通と、ロマン・ロランから高田に宛てられた9通の手紙とを時系列を整えて読み合わせるならば、1931年春の高田のパリ到着から、ロマン・ロランが死去した1944年までの間の高田の生活の重要な折節を鮮やかに彩る見事な往復書簡集を構成しているのだった。この往復書簡はその一通一通が、高田が『分水嶺』で語っている彼の経験談を裏付ける物的証拠となっており、高田とロマン・ロラン

の交流の親密さが一層印象深く理解されるのだ。そして、高田の経験にできる限り寄り添って得ることのできたこの印象こそ、私にとってこの検証作業の十全性を保障してくれるものとなったのだ。

高田が「自分のために」記した回想録の記述は、いくつかの事実と記憶のずれを含んではいても、そのずれさえもが事実との対比の中で確認可能であり、彼の経験内容を忠実に伝えていることは疑いない。ならば同様にして検証可能であろうと期待されるもう一つの事項が浮かび上がる。それが「新聞記者高田博厚」というテーマだった。高田は一九三五年に、淡徳三郎と共同で「日仏通信 (*Quotidien Franco-Japonais*)」を創刊し、その後高田自身は毎日新聞の特派員となったりもしたが、並行して「日仏通信」は継続し、高田が一九四四年にパリを離れるまでの十年弱の間発行されたという。しかしそれを証拠立てるこの日本語新聞の現物は一部も残存していないともいう。とはいえこの事を疑うこともできない。なぜなら、当時のパリに外国人として生きて、もしも新聞記者というような立場になかったならば、そして途中からは占領者（ナチス・ドイツ）側の同盟国人としてフランスの外人記者協会副会長という特権的な立場に置かれなかったならば、高田が『分水嶺』中で語っているフランス被占領時代を通じてのあれこれの彼の振る舞いも体験もありえなかっただろうからなのだ——食料配給制の状況にあってロマン・ロラン始め幾人もの友人たちに「食料補給」をすることができた、ハンガリー系ユダヤ人の同僚記者を迫害の危険から保護することができた、遠くソミュールの地に引きこもっていたマルセル・マルティネが病死したときに、パリから車を飛ばして葬儀に立ち会うことができたのは親友のうちでも高田ただ一人だった。その他にも、ヴィシーでの対独協力派と抵抗派入り乱れての「腹芸」の目撃、パリでの友人の多くが加わっていたレジスタンスへの情報提供、ペタン元帥のナンシー巡行に同行して聞くことができた老元帥のスタニスラフ広場での演説をめぐるエピソード、等々、すべては、その時代その状況にあって、彫刻家高田ではなく、新聞記者高田でなければ持ち得なかつ

た体験の報告なのだ。

その新聞記者高田がどんな様子で仕事をしていたのか、その姿を彷彿とさせる報告が、高田本人の言ではなく、高田を知るバリのフランス人による記事として発見することができた(図版8：1939年2月3日付「ユマニテ」紙)。

LES PETITS MÉTIERS DE PARIS

LE DIRECTEUR DU PLUS PETIT JOURNAL DU MONDE

Un ancien jardinier au fond de Yangpéard, au les arbres tremblent des colorations d'automne, parés les vibrants et les pas de femmes. Des câbles d'acier, sous, pourraient au-dessus de jordan, la façade luxueuse de l'immeuble, sortit de paquette immense dans la nuit.

Takata Hirotsuna Takata, le directeur du plus petit journal du monde, petit bout d'homme sans visage, dans une cuisine étroite.

Mais pourquoi nous de politique internationale? Aussi, la souffrance crève le visage de Takata. On a l'impression que ce petit homme a la force de tenir aussi facilement le bout de l'aiguille dans le creux de sa main. Comme une machine, la terre tourne dans la main de Takata. Il joue avec le bout. Le spectacle barbare qui se joue définitivement sur le globe sensible se dérouler sous nos yeux. Le visage de Takata resplendit impossible.

— Le terre est une sorte d'orange indéchirable. Si nous voulons nous la partager, nous serions assésés et cette poignée d'excitantes que font mourir quotidiennement des milliers d'hommes, de femmes et d'enfants pour assouvir leur instinct de pouvoir.

Hirotsuna Takata agit, par expérience, qu'il n'est pas nécessaire un homme. Son journal, c'est dans ses yeux japonais, et surtout, sur une enveloppe blanche sur par le poids ou par ainsi il se trouve certains d'abonnés pour subsister et vivre relativement assez bien. Une



中華通信社設立

上海でまた不祥事件
英紙の液印

diagne de lecteurs sont à Paris : les autres, parcourent tous les continents, sont éparpillés dans les grandes villes, et les provinces. Ils aiment, par ce journal rédigé en japonais, uniquement pour des Japonais, quel rôle joue Takata par rapport aux cinq parties du monde.

Takata, qui est en même temps le traducteur de Romola Rolland au Japon, est, lui et son journal,

deux de Romola Rolland et de ses femmes, d'Alain, de Charles Villard, de Tristan Rémy, de Léon Tardieu, d'Hirotsuna Takata.

En parlant des écrivains, Takata prépare sa page de spécimens : théâtre, cinéma, musique, exposition d'art et, dans la même rubrique, l'adresse de deux ou trois restaurants japonais à Paris, et l'on mange du poisson cru. Tous jours très calme, Takata téléphone, ouvre des télégrammes qui lui parviennent de toutes les villes du monde. Avec son objet, il compose en japonais des signes idéographiques qu'il adresse de nuit en des boîtes au télégraphe. C'est à ce télégraphe, cependant, une idée. Deux arbres croissent au bois, le bord est fermé par trois arbes. Un homme se sur une montagne recouverte de neige. Une femme entre dans une maison, l'autre le suit ou l'accompagne.

L'écriture japonaise comprend à lui-même mille signes. On ne s'y frotte pas de les connaître tous. Mais chaque signe, dans l'écriture, s'indiquent dans de la liberté et du repos hebdomadaire. Ces mots n'ont aucune signification dans le langage japonais.

Dans la simplicité de son langage primitif, le peuple japonais ne s'imaginerait pas qu'il pourrait avoir à son sentiment de classe à lui quel, selon la forte expression de Charles-Louis Philippe s'adressent à l'ordre.

Albert FOURNIER.

TAKATA rédigeant son journal

Il exerce le rôle de directeur responsable, il rédige, compose les colonnes, corrige, imprime sur l'écriteur mécanique d'une seule feuille dactylographiée par ses propres moyens. On pense à Bolano travaillant aussi dans la petite rue l'Alsacien pour imprimer ses livres. Et par ses quatre correspondants, est une plus heureuse, qui nous permet même d'écrire Rodin, Takata est également sculpteur. Des sculpteurs, des leurs liges, Amis, des forces de femmes, mes, magnifiques, des études, et les

(図版8 1939年2月3日の「ユマニテ」第8面。この頃の日刊紙「ユマニテ」は最終ページ(6面か8面)に「パリ・郊外」と題する欄を設けて市井の雑多な情報を伝えていたが、そこにしばしば「パリの手仕事様々」というコラムが現れ、テイラー、靴職人、パン屋等々の職人の技が、そこに世相を反映しつつ紹介されている。そのコラムのひとつに、「世界最小新聞社社長」という肩書きで高田が登場したのだ。詳しくは「世界最小新聞社社長——『ユマニテ』紙に登場した高田博厚(1939年)」Septentrional：日本フランス語フランス文学会北海道支部論集3号を参照されたい。)

これもまた、高田が回想録の中で、「フランス人の新聞記者たちが面白がって世界最小の新聞社社長の記事を書いた」と記していたことが手がかりとなったのだった。

結果的に私は、高田の渡仏（1931年）から、1939年の独仏不可侵条約締結のあおりを受けて発行停止処分を受けるまでの「ユマニテ」紙を閲読し通したことになるが、このことは高田が暮らしたパリとフランスのこの時代の空気にまるで直に触れるまたとない機会となった。またそのおかげで、私は、『分水嶺』一書を通読するだけの読者には決して捉えきれないであろう高田の「経験」の深層（真相）に、私なりに可能な深さまで辿りつけたという思いがある。いずれにしても私にとって、人間高田博厚と触れ合う豊かな経験であった。

ロマン・ロランと高田博厚の二人が交わした手紙類（絵葉書が一葉ずつ含まれている）はそれぞれ別の二つのフォルダーにまとめられていた。そして高田の手紙14通の間には二点、彼の手紙ではないものも入っていた。それらについては別途まとめた論考、「ロマン・ロランに届いた一通の日本語の手紙」（小樽商科大学言語センター広報22, 2014）および「レオン・ドゥーベル友の会の『趣意書』」（小樽商科大学人文研究 126輯, 2013）を読まれたなら、なぜそこに入り込んでいたのかの経緯が理解されるし、とりわけ後者は、『分水嶺』中の一章を「未生前の光」と題して紙幅を割いて語るほど、高田にとって未見の（高田渡仏時すでに死後18年の）この詩人が実に大きな存在であったことが改めて納得できるはずである。

こうして『分水嶺』の記述を事実として裏付ける記録や記憶を尋ねる過程で二人の往復書簡が発見されたわけだが、それと併せてロマン・ロランの未公開の日記の中にも関連する貴重な証言を見つけることができた。これらを二人の往復書簡と併せ読むならば、高田との出会いがロマン・ロランに対していかに強烈な印象を与えたか、その後二人の間がいかに深い理解と思い遣りの絆で結ばれていったのかが実感できるのだ。このロマン・ロランの日記

(手稿) を解説するに当たっては非常に困惑したことがある。

1932年5月のページにロマン・ロランは「彫刻を始めてわずか2年だ」と記しているが、これは「12年」の誤りなのだ。高田自身が告白しているように、ロマン・ロランと初対面の時にはフランス語が少しも話せなかったくらいだから、つたないフランス語のために12年と言うべきところが2年となって伝わってしまったことは疑いない。しかし同じ日記のページにロマン・ロランが(いささか驚きをこめて)「彼は、将校の娘婿あるいは将校か憲兵の兄弟でもあり云々」と書き留めているのを見ると、二人の対話の中で、高田からどんな情報がフランス語でどれだけ正しく発せられたのか、ロマン・ロランはそれをどの程度正しく受け取れたのかが判然としない。それをこのまま日本語にして良いものか躊躇われる。その窮地を救ってくださったのが、高田の著作権継承者となる大野惇氏だった。氏は私がBnFに納められていた高田書簡オリジナルの複写の許可を得られるように同意書を書いてくださったが、同時に氏ご自身でも、尊敬する義父の足跡を形あるものとして留めおきたいとの思いから、独自に資料整理を進める中で高田の戸籍を仔細に辿りなおし、博厚には、大正七年(1918年)没の長兄浩蔵の他に次兄典文がおり、この人物が陸士二十八期卒の憲兵であったことを突き止められたのだった。高田はこの事実をほとんど口外していなかった(義理の子息となる大野氏には漏らしていたという)から、私にはロマン・ロランが記したこの一行を理解する手がかりがまったくなかった。私のこの疑問を解いてくださった大野氏にはここに記して感謝申し上げたいが、氏はこの往復書簡集が一書として上梓されるのを俟たずに2013年11月に死去されている。ただし氏には、全書簡とロマン・ロランの日記抜粋の拙訳を生前お目にかけることができ、その折に、「生前の博厚が見たならば涙を流して喜んだと思われます」という感想をいただくことができた。

作者が自らの経験を振り返って語る自伝的記述の中には、著者自身が自覚していないくとも、脚色や嘘が紛れ込んで「事実」を見えにくくしてしまう危

険が潜んでいる。その危険が表面化すると、つまり著者の作為・不作為にかかわらず記述内容が事実から乖離していることが明らかになると、読者のうちには著者に対する疑念や誤解が避けがたく生じる。高田の記憶錯誤から生まれた「ロマン・ロランによる多喜二虐殺抗議文」伝説はその典型的なケースであっただろう。しかしそうであったとしても、高田の長きに渡ったフランスでの人生経験の「詩と真実」というべき回想録『分水嶺』を、ロマン・ロランと高田博厚の往復書簡とを併せ読むことができるようになった今、かつて生じたかもしれない著者高田に対する疑念も誤解もここで完全に払拭されたと信じることができる。

それにしてもやはり、高田のあの記憶錯誤は何だったのか。高田が『分水嶺』を自分の記憶を頼りに書きとおしたのは間違いないだろう。雑誌発表時に読者からいくつかの記憶違いを指摘され、著者自身もこれを認め改めたことを見るならば、なおのこと強くそう思われる。「日仏通信」社長を話題にした「ユマニテ」紙の記事について、「ちょんまげ」姿で記事を書く自分の挿絵が載っていたと40年近い昔を回想した高田だが、1939年の同紙に私が見つけた当の記事では、実際に挿絵に描かれた高田は「ざんぎり頭」の明治の書生風に描かれていたという事実などは、却って『分水嶺』全体を通しての高田の記憶力の確かさを強く印象付けもするのだ。その高田が、自分の記憶錯誤であったと承知の上で「ロマン・ロランによる多喜二虐殺抗議文」というエピソードをそのままに読者に伝えようとしたのは、高田がそこに何らかの「真実」を認めていたからに違いない。そんな秘かな確信から、『分水嶺』の記述を手がかりに1930年代の高田のフランス滞在期間関連情報を渉猟して、偶然にとはいえ終にロマン・ロランと高田の往復書簡にたどり着いた今、高田がそれとなく放置しておいたこの小さな記憶錯誤は、私が高田博厚という人間に出会うべく調べられた天の配剤であったとさえ思われるのだ。